

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

# 永久保存（10-1）

兵庫県埋蔵文化財調査報告書 第114冊

伊丹市

## 緑ヶ丘遺跡

1992

兵庫県教育委員会

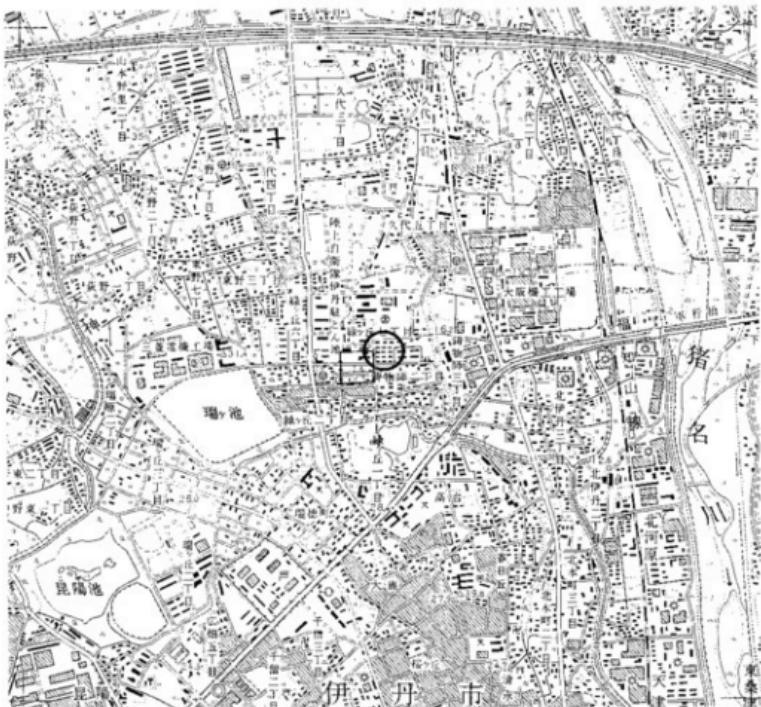
## 例　言

- 本報告書は、陸上自衛隊千僧宿舎改築にともない、防衛庁大阪防衛施設局の委託を受けて兵庫県教育委員会が1991年（平成3年度）に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本書は、久保・鐵が執筆し、その文責は文末に記した。
- 本書に収録した遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25000 地形図「伊丹」を使用して作成した。
- 調査にあたっては、下記の方々、機関にご協力を戴いた。記して謝意を表したい（敬称略）。

村川行弘（大阪経済法科大学）  
小長谷正治（伊丹市教育委員会）  
防衛庁大阪防衛施設局  
防衛庁千僧駐屯地

## 目　次

1. 緑ヶ丘遺跡の周辺.....	1
地理的環境	
歴史的環境	
2. 調査の概要.....	2
調査に至る経緯	
調査の方法	
3. 遺構と遺物.....	3
掘立柱建物跡	
土坑・溝	
4. まとめ.....	13



第1図 遺跡の位置 (1/25,000) □は伊丹魔寺

## 1. 緑ヶ丘遺跡の周辺

### 地理的環境

緑ヶ丘遺跡は、伊丹市緑ヶ丘7丁目に所在する。遺跡は、猪名川の右岸に広く分布する中位段丘上に立地しており、調査地付近での海拔は約30mを測る。猪名川の沖積平野との比高差は約15mを測る。また、現在の海岸線からは約10km遡った位置にある。

### 歴史的環境

緑ヶ丘遺跡の周辺の段丘上には、好適な立地環境と相まって、多数の遺跡が知られている。遺跡の位置は第1図に示したが、中でも緑ヶ丘古墳群と伊丹庵寺は緑ヶ丘遺跡との関係からも特筆すべきものであろう。緑ヶ丘古墳群は、緑ヶ丘遺跡の範囲と一部重複しつつ分布していた古墳群で、その位置は現在の県立伊丹高校付近を中心としていたようである。第2次大戦直後までは一部が残存しており、須恵器・土師器・鉄器等が出土したという。大部分は戦前に未調査のまま破壊されており、その詳細を知りえないが、奈良時代に伊丹庵寺が創建される背景となった地域集団の所産であった可能性も否定できないであろう。

伊丹庵寺は、今回の調査地の南西約100mに位置する寺院跡である。法隆寺式類似の伽藍配置をもち、金堂・塔などが国指定史跡となっている。これまで数次の調査がおこなわれ、回廊を含む伽藍が現在の防衛庁中部方面総監部用地にまで延びていることが知られている。



第2図 調査地付近から伊丹庵寺を望む

## 2. 調査の概要

### 調査に至る経緯と調査の方法

今回の調査は、防衛庁大阪防衛施設局による陸上自衛隊千僧宿舎の建て替え工事に先立って実施された。全面調査にさきだって1991年5月におこなった確認調査では、宿舎建築予定範囲のうち270m<sup>2</sup>について遺構が検出されたため、当該範囲について全面調査を実施した。

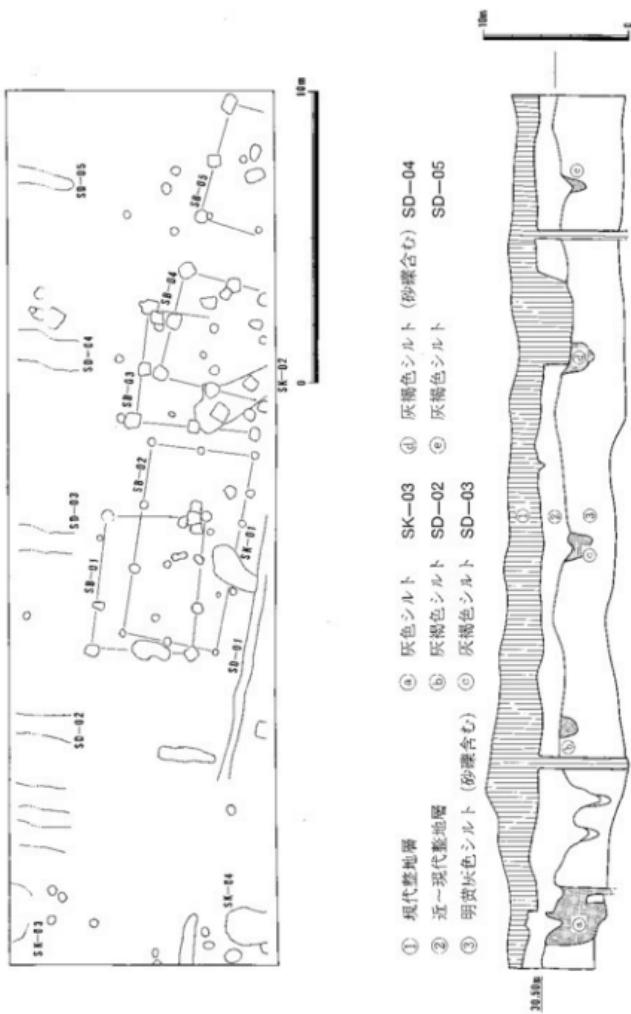
調査区内には第2次大戦後に、木造の自衛隊宿舎が建設されていた。これによる擾乱は、段丘最上部の地層にまで及んでおり、遺跡設営時期の旧表土（いわゆる遺物包含層）は全く遺存していなかった。従って全面調査の際には、重機による掘削を段丘層上面（地山）直上までおこなった後、遺構の検出作業を実施した。なお、現表土下に一部で整地層と思われる堆積が見られ、この中より従軍徽章が出土したことを付記しておく。

遺構測量は、調査区内に任意の座標系を設定して実施し、水準測量には兵庫県立伊丹高等学校内の水準点を使用した。また、伊丹廃寺との位置関係を明確にするため、同廃寺内に設置されている国土座標点を基準として、調査区内の座標に国土座標を移設した。



第3図 調査区全景

### 3. 遺構と遺物



第4図 調査区平面図(1/200)・地層断面図(1/200-1/50)

## 遺構

今回の調査では、掘立柱建物跡 5 棟、土坑 4 基、溝 7 条のほか多数の柱穴が検出された。前章でも述べたように搅乱が著しく、遺構の遺存状況は必ずしも良好とはいえない。包含層が遺存していないかったため、遺物の出土もごく少数にとどまり、このため遺構の時期の判断には著しい困難が伴った。しかし、概ね伊丹廃寺の存続期間である奈良～平安時代以外の遺物は出土しておらず、遺構に伴った僅かの遺物からも、遺構群の年代はほぼこれに相当するものと考えられる。

遺構は、調査区内では南半に偏る分布を見せており、遺跡の中心は今回の調査範囲より南に位置しているものと思われる。

### a. 掘立柱建物跡 (SB-1~5)

5 棟の掘立柱建物跡は、調査区の南半で検出された。その長軸（梁行）の方向と柱穴の形態から、大きく 3 グループに分離される。掘立柱建物跡 2・3、掘立柱建物跡 4・5 はそれぞれ軸線の方位が一致する。また掘立柱建物跡 1 は、前 2 グループとは異なる方位を見せている。

また掘立柱建物跡 3～5 の柱穴は、四辺形を呈している。

掘立柱建物跡 4・5 は同一建物であった可能性も否定しきれないが、ここでは調査時点の認識通り分離して取り扱う。



第5図 掘立柱建物跡 1・2 付近（北から）

### 掘立柱建物跡 1

調査区北半に位置している。2間×3間の建物跡であるが、柱穴2基が既に消失していた。柱穴は長径50cm前後の不整円形または不整四辺形を呈しており、遺存深度は10~30cmを測る。柱間は、梁行で1.60~1.78m、桁行で1.50~1.68mを測る。

桁行を東西にもち、その方位はN86°49'Wである

1基を除いていずれも柱痕が検出されており、その直径は12~26cmである。

柱穴内からは、遺物は全く出土しなかった。

### 掘立柱建物跡 2

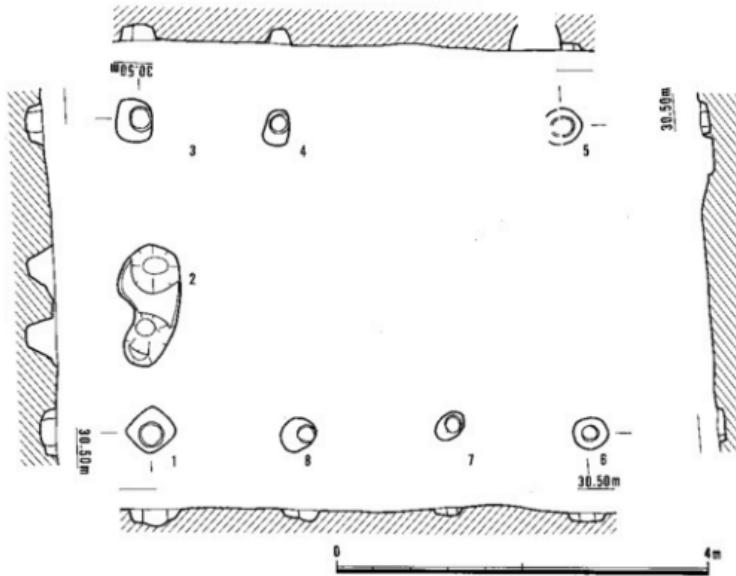
掘立柱建物跡1と重複している。2間×3間の建物跡であり、全ての柱穴が検出された。柱穴はほぼ円形を呈し、その直径は30cm前後を測る。また、遺存深度は6~26cmを測る。

柱間は、梁行で1.70~1.80m、桁行で2.15~2.35mを測る。

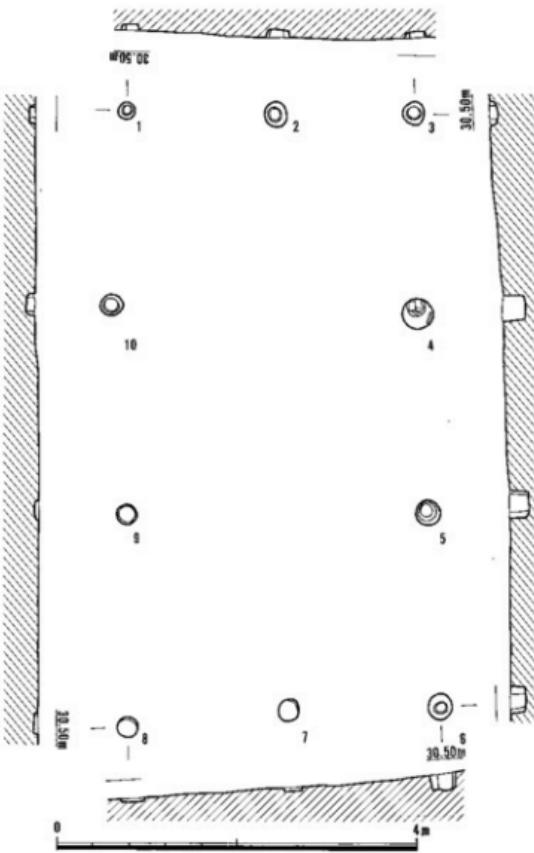
桁行を東西にもち、その方位はN83°23'Wである

7基から柱痕が検出されており、その直径は12~20cmである。

柱穴4を除き、遺物は全く出土しなかった。



第6図 掘立柱建物跡1平面・断面図 (1/20)



第7図 振立柱建物跡 2平面・断面図 (1/20)

2種類あり、2.2cm角と1.2cm角の平行四辺形を呈している。側面はナデによって仕上げられている。2mm前後の砂粒を含む。

これらの他に、S D - 1 からも平瓦の破片1点が出土している。これは内面に布目を残し、外面には原体に巻き付けた繩の痕跡が認められる。

いずれも平瓦であるため、明確な時期は決め難いが、成形技法からみて平安時代初頭のもの

柱穴4からは、瓦・須恵器が出土した。

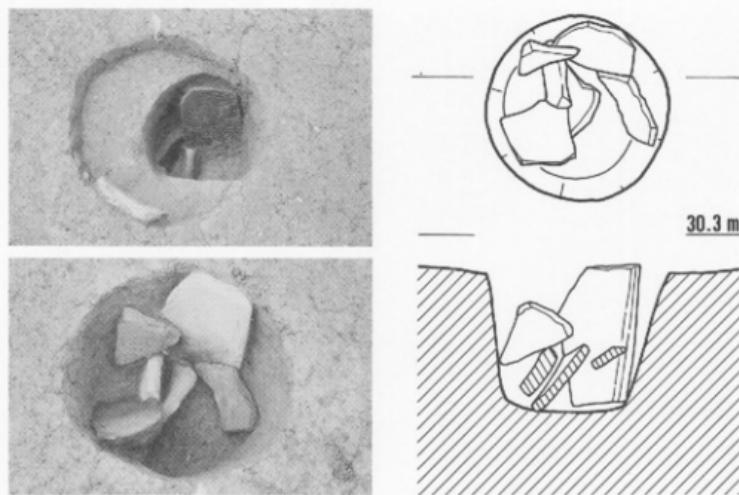
遺物はいずれも柱痕に添えるように柱穴内に埋設されており(第8図)、柱を立てる際に何らかの意味を持たせていた可能性が高いものと思われる。通常、沖積地の建物跡などに普通に見られる、柱の沈下防止を目的とした根石、礎板のような機能的な意義は、建物の立地条件からみて、説得性を持たないだろう。

出土した遺物は、復原の結果、須恵器壺の破片1点、半瓦5点である。

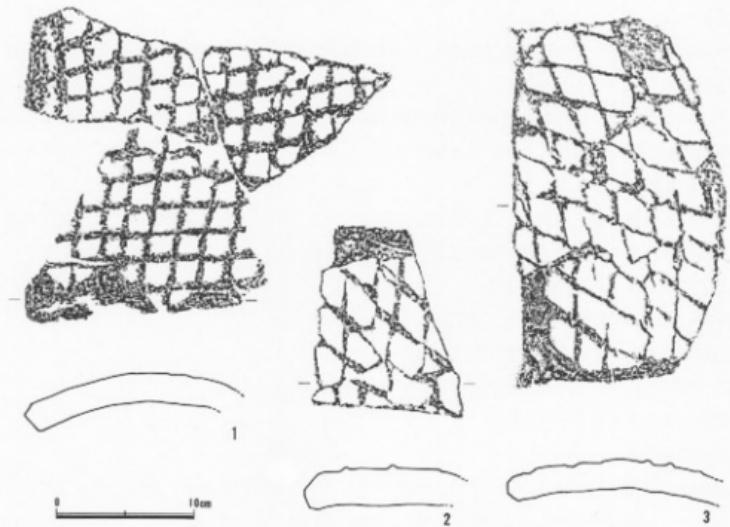
瓦は、胎土・焼成から2個体分と考えられる。

第9~10図は、柱穴出土の須恵器・平瓦である。

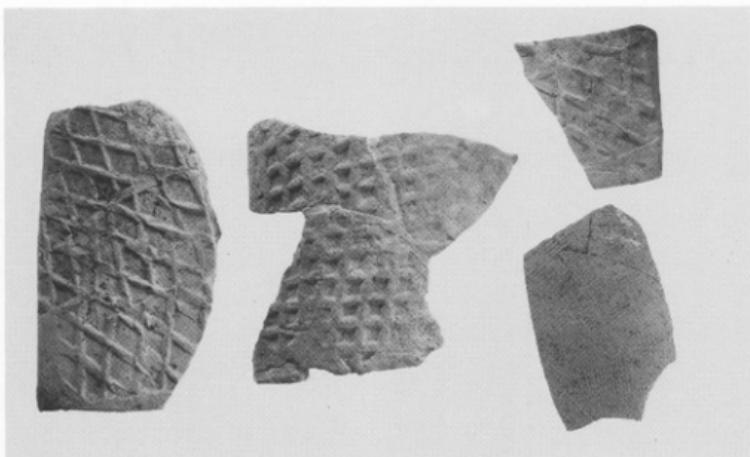
平瓦は、焼成が甘く外面の剥離が著しいが、桶巻作りで格子目印きを施している。印きの原体は



第8図 挖立柱建物跡2 柱穴4内の遺物出土状況



第9図 挖立柱建物跡2 柱穴4内出土の瓦



第10図 掘立柱建物跡2 柱穴 内出土の遺物

と思われる。

須恵器は、大型の壺の胴部破片である。表面に格子状の叩き目、裏面には同心円叩き目が観察される。

これらの遺物からは精緻な時期決定は困難であるが、瓦の製作技術上の特徴から概ね平安時代初頭の範囲で捉えられるものかと推測する。

#### 掘立柱建物跡3

掘立柱建物跡4と重複している。南北に主軸をもつものと思われ、調査区内では2間×2間まで確認できた。柱穴は6基が検出された。いずれも四辺形を呈し、一辺は50cm前後を測る。また、遺存深度は8~30cmを測る。

柱間は、梁行で1.66~1.92m、桁行で1.94~2.08mを測る。

桁行は東西で、その方位はN 8°23' Eである

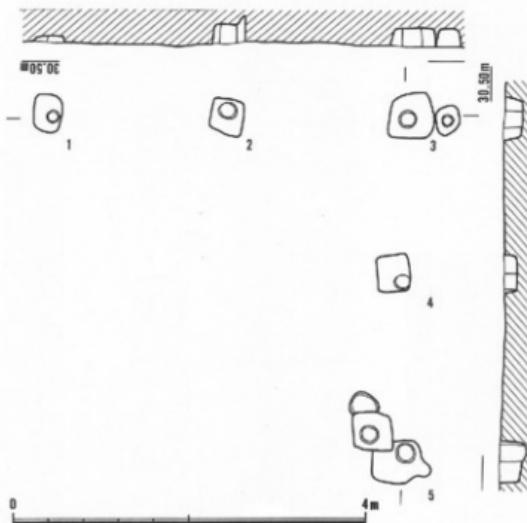
いずれも柱痕が検出されており、その直径は16~23cmである。

遺物は全く出土しなかった。

#### 掘立柱建物跡4・5

調査区の最東南端に位置している。2棟は完全に一致した方位にあり、調査時点では桁行を南北にもつ2棟の建物跡として識別したが、1棟の東西棟であった可能性も否定しきれない。

いずれにせよ、建物跡は調査区外にのびており、その全容は今回の調査では明らかにはでき



第11図 捜立柱建物跡 3 平面・断面図 (1/20)

なかった。

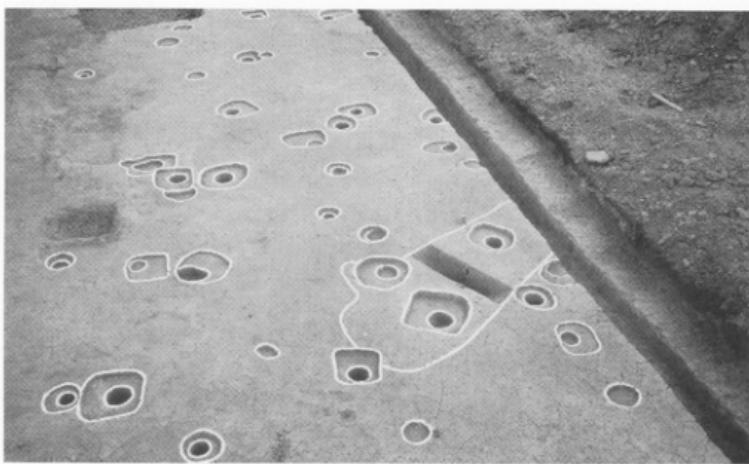
掘立柱建物跡 4 は、調査区内で柱穴 6 基が検出され、2間×2間までが確認された。

柱穴は不整四辺形を呈し、一辺は50cm前後を測る。また、遺存深度は6~14cmを測る。

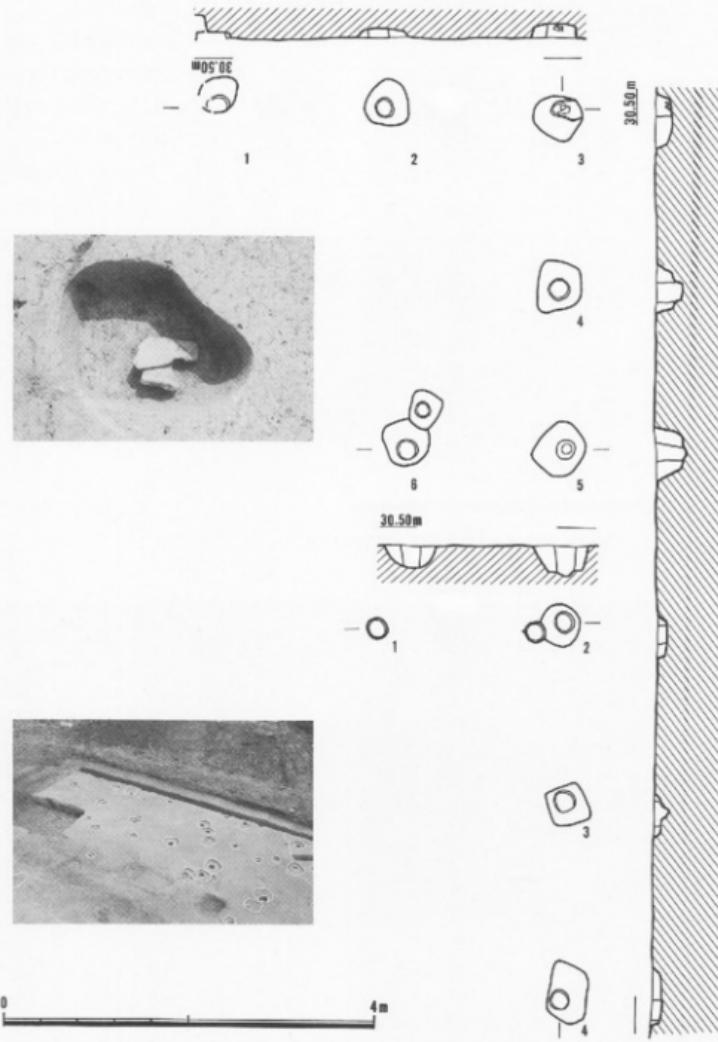
方位は N 17°53' E である。

柱穴からはいづれも柱痕が検出されており、その直径は17~26cmである。

遺物は全く出土しなかった。



第12図 捜立柱建物跡 3 ~ 5 付近 (北から)



第13図 据立柱建物跡 4・5 平面・断面図 (1/20)

掘立柱建物痕 5 は、4 の東に位置している。柱穴 4 基が検出され、2 間×2 間までが確認された。柱穴のうち 1 基は、柱痕の下底のみが確認されたものである。

柱穴は不整四辺形を呈し、一边は 50cm 前後を測る。また、遺存深度は 10~35cm を測る。

建物の桁行の方位は N 17°53' E である。

柱穴から検出された柱痕は、直径 18~20cm を測る。

やはり遺物は全く出土しなかった。

#### b. 土坑 (SK-1~4)

土坑は 4 基が検出された。調査区内で全体が検出されたのはうち 1 基で、他の 3 基はいずれも調査区外に延びている。また、攪乱による著しい破壊をうけたものもある、その様相は全体に不明な点が多い。いずれからも、遺物は出土しなかった。

##### 土坑 1

土坑 1 は、調査区中央の南端に位置している。溝 1 と重複しており、溝に切られている。

不整形な掘り込みを見せ、長径は 1.85m、短径は 0.98m、深さは 35cm を測る。急斜度の掘り込みを見せ、土坑底は 2 段の幅の狭い平坦面となっている。内部の堆積は自然堆積によるものと思われ、砂質のシルトを主体としている。

##### 土坑 2

土坑 2 は、やはり調査区中央の南端に位置している。掘立柱建物跡 3・4 と重複しており、土坑埋没後に、柱穴が掘られたことが確認された。

一見溝状の掘り込みを見せ、調査区内で長径は 2.65m、短径は 1.08m、深さは 47cm を測る。調査区外へと延びるため、全長は不明である。急斜度の掘り込を見せ、土坑底は幅の狭い平坦面となっている。南にむかって次第に浅くなる。内部の堆積は自然堆積によるものと思われ、砂質のシルトを主体としている。

##### 土坑 3

土坑 3 は、調査区西北端に位置している。北は調査区外へのび、南は擾乱のため破壊されており、ごくわずかな部分が検出されたにすぎない。

皿状の掘り込みを見せ、深さは 40cm を測る。土坑底は緩やかに凹んでいる。内部の堆積は砂質のシルトを主体としている。

##### 土坑 4

土坑 4 は、調査区西南端に位置している。皿状の掘り込みを見せ、調査区内で長径は 1.38m、短径は 1.26m、深さは 15cm を測る。南は調査区外へと延びるため、全長は不明である。

土坑底は平坦面となっている。内部の堆積は砂質のシルトを主体としている。

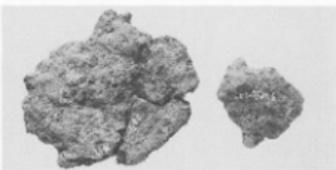
#### c. 溝 (SD-1~5)

溝は 5 条が検出された。2 つの異なる様相を持つグループに分離される。第 1 は、調査区の

北端で検出されたもので、南北に平行して延びるもの、第2は東西に延びるものである。

#### 溝1

溝1は調査区南部で検出された、東西に延びる溝である。調査区西部で攪乱のため分断されている。東・西ともに調査区外へと延びるため、全長は不明である。幅35cm、深さ15cm前後を測る。急斜度の掘り込みを見せ、底は緩やかに凹んでいる。内部の堆積は砂質のシルトを主体としている。



第14図 溝1出土の鐵滓

溝1からは、須恵器・土師器・鐵滓が出土した。

ほとんどが小片であり、量的にも少ない。鐵滓は3点が出土しているが、いちばん大きなものでも拳大程度である。土師器は繊片と化しており、器種の判別が困難である。

#### 溝2～4

溝2～4は、調査区の北側で、等間隔に平行して検出された。いずれも調査区の北に延びており、南側は攪乱のため一様に破壊されている。溝の形状はいずれも類似しており、浅い掘り込みを見せる。この内、溝1～3からは遺物が出土している。

1は口縁端部を下方に折り曲げ、偏平な天井部を持つと思われる杯蓋である。細片のため口径を復原できなかった。

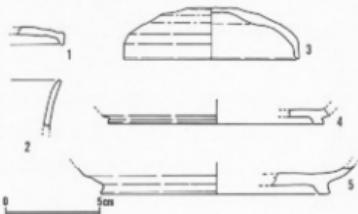
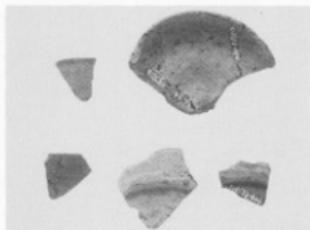
2は外方に開きながら延びる長頸壺の口縁部と思われる。

3は復元径9.4cm、器高2.8cmをはかる杯蓋である。丸みを持つ天井部の約3分の1にヘラ削りを施し、残りは回転ナデで成形し、口縁端部は内傾する。

4・5はやや外に開く高台をもつ杯身の底部片である。高台は、粘土を張り付けて成形する。復原底部径は、それぞれ11.2cm、12.2cmをはかる。

1～4はSD-3から、5はSD-2から出土した。

所屬時期は繊片であるため確定し難いが、3のみが田辯福年のTK-217型式に併行するものと思われ、他は、平安時代初頭におさまるものと考えられる。



第15図 溝1～3出土の遺物

#### 4. まとめ

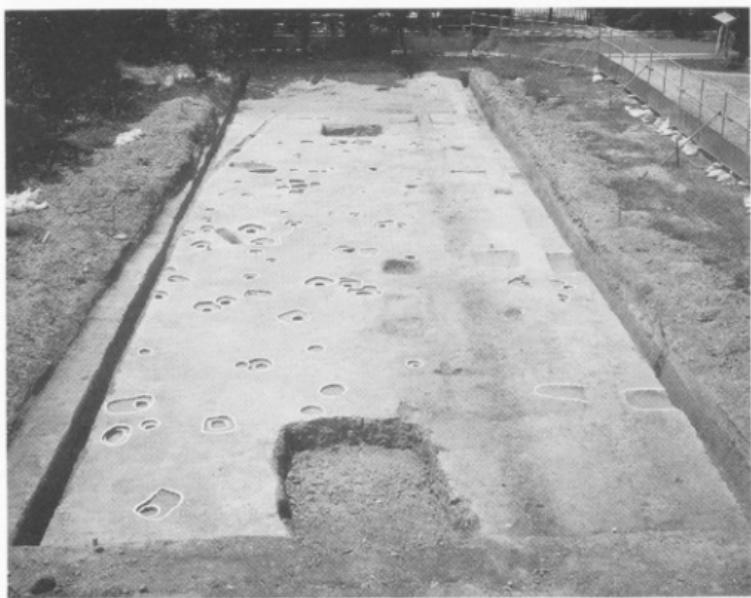
遺構・遺物のうち注目されたのは、溝1から出土した鉄滓である。大小2点ではあるが、これは寺院周辺に鍛冶遺構が存在した可能性を示唆するものとして注意しておきたい。調査区内では、これ以外に鍛冶遺構の存在を積極的に検証しうる遺構・遺物は検出されなかったが、今後の周辺での調査では、十分な注意を払ってゆくべきであろう。

今回の調査によって、伊丹庵寺を取り巻く遺構群の一端が明らかになった。寺院建立および寺院の維持には、大規模な労働力が必要であったものと推測されるが、今回の調査では、このような寺院の基礎となる状況を理解するために必要な、周辺遺構群の一端を把握することができたものと思われる。残念ながら今回の調査区は、建造物の直下のみであり、より南へ延びる遺構群の分布状況を完全に把握することはできなかった。こうした資料の蓄積によって、古代寺院の周辺状況を明らかにしてゆくことが、今後私たちに与えられた課題である。

今回の調査範囲では、遺構の遺存状況が劣悪な中で一定の成果をあげることができたが、今後特に、今回の調査区の南側での開発事業にあたっては、慎重な対応が必要であろう。



第16図 調査区空中写真



第17図 調査区全景



調査前



機械掘削



調査風景



現地説明会

兵庫県文化財調査報告書 第114号

## 伊丹市 緑ヶ丘遺跡

平成4年3月 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5  
TEL. (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会  
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 交友印刷株式会社  
〒652 神戸市兵庫区水木通9丁目1番34号